

中国における農村観光開発の特徴と趨勢に関する研究

李 剛*¹・黄 朕*²

論文要旨：

農村観光（アグリツーリズム又はグリーンツーリズム）は中国においても長年の開発を経て、徐々に規模が形成されつつある。現在、農村観光開発は地元政府参加度の持続的な増強、開発の段階的な全域化、供給側の改革牽引、ハイエンド化、ニーズの多次元化などが現れてきている。農村観光の開発モデルには主に農村主題旅館（テーマホテル）、郷土文化民宿、ハイグレードリゾートホテル（逸品リゾート郷・Boutique Resort）、レジャー集落、近代農業荘園などがある。ところが、商品の同質性（homogeneity）、景観の原生性（authenticity）の欠如、従業員の職業素養の低さと遅れ、関連政策執行の不整備と逸脱などの原因によって農村観光開発と発展が制約されているといえる。農村観光の将来的な発展を行なうには商品と組織形式の多様性を重視し、基準化に基づいた個性のある農村観光品質管理を実施し、全面的に「観光+（プラス）」という理念を取り入れ、農村観光の組織化を強化すべきだと考えられる。本論では、観光による貧困援助、研修強化、綺麗な農村づくりなどの面から農村観光開発の政策提案へアプローチすることを目指す。

キーワード：農村観光・開発特徴・モデル構築・発展趨勢・政策提案

一、はじめに

一般的に言えば、農村観光とは農村地域及び農事に関わる風土・風物・風習・風景を組み合わせた農村情緒を吸引物とし、観光客を惹きつけ、休暇・余暇・体験及び学びを行なう観光活動である¹。日本においても一般に都市居住者などが農場や農村で休暇・余暇を過ごすことをアグリツーリズム又はグリーンツーリズムと呼んでいる。そもそも「グリーン」は緑の意味の他、エコロジーの意味もあるので、エコツーリズムと混同されやすいが、実は異なり、「農民泊」などとほぼ同義である。地域行政ではアグリツーリズムによって都市と農村が交流し、地域振興が図られる。そのなか、グリーンツーリズムは、「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」、「農山漁村で楽しむゆとりある休暇」とも言いかえられる。グリーンツーリズムの基本は、農山漁村に住む人々と都市に住む人々とのふれあい、つまり都市と農山漁村との住民どうしの交流である。その媒体としては、

※本論文は2013年度中国国家社会科学基金プロジェクト「観光目的地における周期的進化とガバナンスメカニズムに関する研究」（プロジェクトコード：13 BGL 089）、2015年度天津市哲学社会科学研究規畫基金プロジェクト「京津冀地域における観光協力持続可能な発展のための保障メカニズムに関する研究」（プロジェクトコード：TJYY 15-009）の研究成果の一部である。

*¹ 李剛（1964年6月～）、男性、中国天津市出身、天津財経大学商学院観光学部、教授、修士課程の指導教官。博士・修士（地域経済政策学）、修士（言語文化学）。主な研究分野：地域経済政策学、観光経済学、観光心理学、言語文化学。2008年5月より大阪観光大学観光学研究所客員研究員、学外研究員。

*² 黄朕（1991年7月～）、女性、中国天津市出身、天津財経大学大学院観光管理専攻修士課程3年生。

体験、産物、生活、文化など農林水産業を中心とした生活の営みそのものといえる。

ヨーロッパが発祥地で、アグリツーリズム（伊）、ルーラルツーリズム（英）ともいう。思潮としてはロマン主義の影響を受けた民俗学が挙げられる。民俗学では農村や地方で残っているとされた民俗資料が重視された。欧州では都市の人が農村に長期滞在してのんびりと過ごすというものだが、日本は都市と農村の距離が比較的近いこと、長期休暇が取りにくい労働環境のため日帰りや短期滞在が多い。団体行動を中心とした旅行形態が好まれることや、祝祭日は別として長期休暇が取りにくいことなど、日本人の価値観・生活様式に合致したグリーンツーリズムが模索されている。このため、あえて「日本型グリーンツーリズム」と表現することもある。

一方、本論の研究対象とする中国の農村観光はすでに国民余暇の重要なキャリアー、農民が収入を増やし、財を築く主な手段、農村経済を発展させる原動力と源泉になりつつある²。2010年から2014年にかけて、中国では農村観光の開発を通じて10%以上の貧困人口の貧困からの脱却が実現でき、観光産業開発に伴った貧困脱却人数が1000万人以上に達したうえ、2015年の中国貧困扶助の約2000余りの貧困村では農村観光開発が展開されていた³。農村観光による富民牽引効果が更に明らかになり、伝統的な農業転換とグレードアップ、生態環境保全及び新たな農村作りに取り組むことが更に大きな役割を果たしている。中国国家観光局の予測によると、今後の5年から10年の間に、中国の農村観光の受け入れ人数が20億に達し、その中の農民の直接の受け入れが10億に達するという⁴。

また、近年、中国においてもスローフード、スローライフなど、効率万能、規格量産化に疑問を投げける人が増えている。それに生物の営みとのふれあいが希薄となり、自然と人間のかかわりが縁遠くなってしまった。そのため、グリーンツーリズムに関心が寄せられている。農山漁村も、地域活性化のため導入を図ろうとしているが、単なる簡易宿泊施設や農産物加工施設など箱物の整備に終わってしまうケースもある。これらをまとめてみると、農村観光の実際の内容として、第一は農林水産物を介した、通じた活動（産直・直売所など）である。第二はイベント（故郷祭り・農林祭りなど）など従来のものである。第三は農業・農村体験（市民農園、田植え・稲刈り、乳搾りなど）である。第四は学校教育における農村や農業とのふれあいである。第五は自然の営みとのふれあいで、幅広く都市と農山漁村との交流一般を指すことが多くなっている。といった内容が挙げられる。

二、農村観光の現状と開発特徴

現在の農村観光は「農家楽」（大都会周辺または近郊の農家によって運営される民宿の一種）という初級形態から脱却して、複合型へと転換しつつある。それに国民の様々な個性的なレジャーニーズに応え、創意化と精緻化へと変わりつつある。

（一）農村観光開発への政府参与度の強化

比較的強い政府参与は中国農村観光における最も著しい特徴である。農村観光は農村の経済を復興または繁栄させるだけでなく、社会機能と環境機能を派生させることができるため、政府から重要視されている⁵。2015年より中国中央政府から新たに一連の恵農補助政策（農民に減税や補助などの優遇政策を与える）が打ち出されるとともに、農村観光への支援が日増しに

全面化され、量と質ともに次第に向上させている。農村生態レジャーと観光を開発し、特色のある観光町村づくりと、多種多様でユニークな農村観光レジャー商品づくりに取り組むうえ、農村産業の融合を推し進め、大いにレジャー農業と農村観光を発展させ、「一村一品」、「一村一景色」、「一村一情緒（趣）」という魅力に富んだ農村づくりに努めようとする。また、第一次、第二次、第三次産業の融合発展を推進し、農村観光の向上計画を実施し、観光消費空間を開拓し、農村観光による貧困扶助を大いに推し進めている。

（二）農村観光開発の段階的な全域化

これは行政区画内における農村観光資源を統合したうえ、農業観光の融合を推し進め、全域化の農村観光を発展させることである。全域化の農村観光開発はレジャー、リゾート、養生の融合だけでなく、パノラマスタイルな素朴な農村の雰囲気、風貌、情緒などは観光と相まっている。更に重要なのは農村観光開発の全部の利益関係者が全て介入し、利益を得て、能力を発揮する。例えば、全域化によって観光者の自らの体験と村人の生活品質はともに全面的な改善ができるようになる。但し、農村観光全域化開発に際して、農村の開発空間、農村の観光産業、農村観光の受け入れ側が強化されるため、農村産業全体においては差異的な、非均衡的な開発を行なう。その中核となるものは観光資源の新たな統合を通じて、それぞれの空間プレートの上で特色の異なる農村観光商品または業態を形成させる。

（三）農村観光開発の供給側の改革

農村観光は「三農（農村・農業・農民）」開発を促進し、経済構造の最適化を推進する面で重要な役割を果たし、率先的に供給側の改革を展開する。農村の第一次、二次、三次の交叉的な融合を推し進め、産業と都市の一体化を推進するなら、農村観光の開発空間を広げることができる。観光客のニーズによって導かれ、観光供給の改革と革新に努め、特色のある農村体験イベント、グルメ、農村民宿民泊を特色のある農村観光商品として重点的に研究開発することに取り組む。農村観光では近代観光消費特徴を踏まえ、供給側において初歩的に個性化・特色化・差異化を持つ観光業態を開発してきた。つまり、「アグリブランドデザイン（農村銘柄設計）」、「アグリ景観デザイン」、「特色のある民家設計」、「民宿設計」、「農村インターネット＋」、「農村セールス企画設計」などを通じて、農村観光の産業チェーンを伸ばし、農民の収入増加を実現させる。それに中国の農村観光と供給側改革は更に高い次元へと変わりつつある。

（四）農村観光開発のハイエンド化

より多くの観光客は農村へ赴き、短い滞在に留まらず、農村の美しい環境を楽しみ、暫くの間農村に在住するという傾向が出た。このような現象は北京や上海など大都会だけでなく、広東省、江蘇省、浙江省など沿海部における比較的裕福な省にも現れた。一部の定年者は静かな生活環境を求めため、一年中の数ヶ月間農村に住み、すでに常態化された農村観光から次第に農村生活への憧れを持って、徐々に理想的な農村観光開発の至高の段階に入ろうとしている。このような生活様式は農村の生態の美しさもあれば、農村民俗文化の深さもある。更に都市型のサービスの品質も保証できる。

(五) 農村観光開発のニーズ多次元

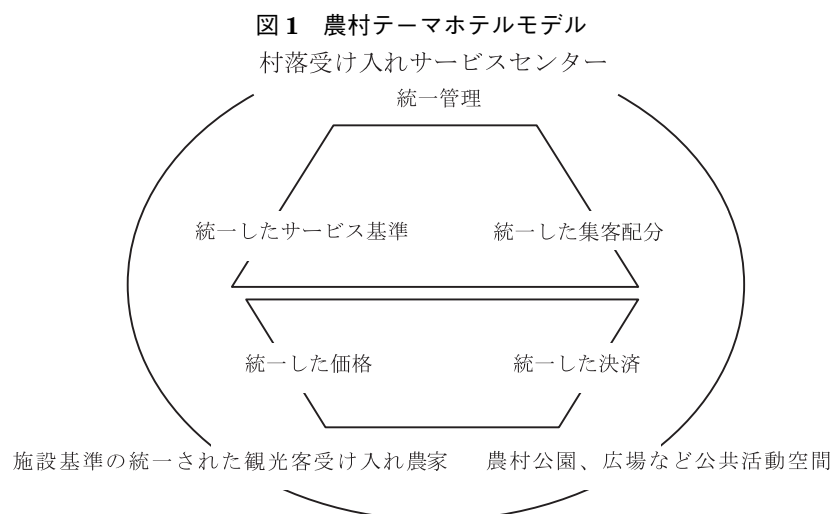
中国国内観光の多極化の趨勢と観光消費の個性化の發展趨勢は盛んなため、国内の農村観光も鑑賞、考察、研修、参与、娯楽、買物及びリゾートを一つにした総合型の方向へと發展し、観光客のニーズの多様化と次元も絶えず向上させる。全体的に見ると、現在の農村観光のニーズは多次元化、多様化、特色化の發展趨勢が現れており、環境観光と文化観光を密接に結びつける多機能、複合型の農村観光商品への観光客のニーズが日増しに盛んになる。観光商品について言えば、農村観光は中身が豊富で多種多様な観光活動のみならず、シリーズ商品の集合でもあり、商品集でもある。これは観光客に提供する観光商品が複合型もあれば単一機能型もあり、異なる消費者のニーズに応えられるからである。つまり、農村観光商品に対するニーズが地域性や観光客の個人的な好みによって様々に異なる。そういうわけで、農村観光開発と發展を行なうには全体的な観光消費市場に向け、個性化のニーズを踏まえた段階的なものでなければならぬ。

三、農村観光開発のモデル

農村観光開発のスタートが比較的遅れたゆえ、相対的に進んだ地域の經驗モデルを参考にすべきであり、更にそれを師範的に広めていく必要がある⁶。現在において農村観光開発の驅動力の視点から中国の農村観光の發展モデルの種類と特徴をまとめる研究がある⁷。本論としても先行文献を参考にした上、現在の農村観光開発の基本状況について更に農村観光開発の主なモデルの精練総括へアプローチしてみたい。

(一) 農村のテーマホテルモデル

ある隣接する観光スポットまたは観光ホットコースにある村落には、その農家の物質条件が比較的均質であるため、基準の統一を実現させやすく、次第に品質化を持つ農村テーマホテルモデルになりつつある（図1をご参照されたい）。一つの農村が一つの「農村ホテル」であ



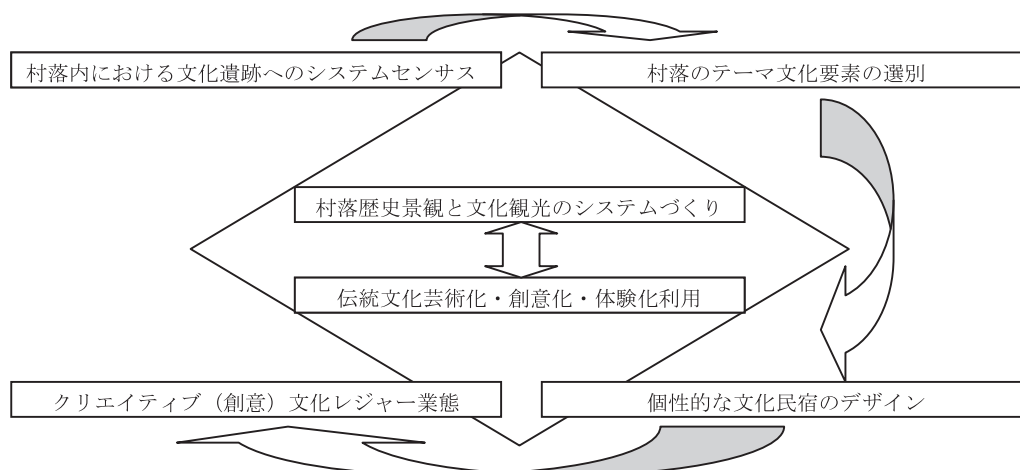
出所：筆者が下記の先行文献を参考にした上、作成したものである。
谢爱良，宋子千，当前乡村旅游发展的特征与趋势 [J]. 中国旅游评论：2016 第一辑—旅游目的地发展，北京旅游教育出版社，2016：85.

り、近代ホテル経営管理理念によって農村観光サービスの規範化と標準化の推進、周辺地域の観光スポットまたは主要道路とのサービスの強化及び評判を重視する。例えば、観光客に生態で心身を癒してもらい、住みやすいライフスタイルを提供する琼海北仍村御泉荘温泉ホテルなどが挙げられる。

(二) 郷土文化民宿モデル

歴史の深みと文化的な雰囲気が際立つ村落には、伝統的な遺跡が完全に保存されていると同時に、一定数量の古い民居が保存されているため、個性化を持つ郷土文化民俗モデルづくりがしやすいと見られる（図2をご参照されたい）。歴史のある農村では文化的な雰囲気が形作られ、村自体がまるで郷土文化展示館のようで、一軒の民宿だけで若干の村落の歴史物語を展示することができる場所がある。例えば、徳清莫幹山の翠城・木竹坞、無界莫幹などが挙げられる。

図2 郷土文化民宿モデル

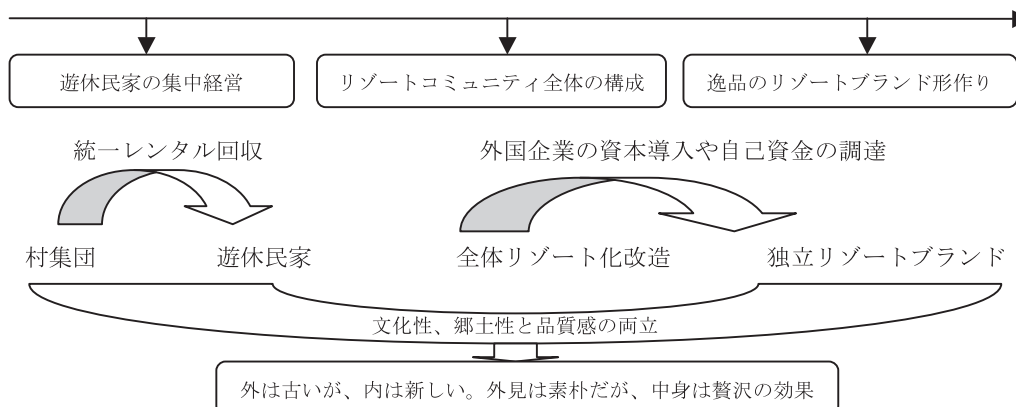


出所：筆者が本論の研究内容に基づいて作成したものである。

(三) 逸品リゾートモデル

優れた長閑な自然環境と天然リゾートの条件に恵まれた村落は、民居建築が伝統的な古い庭付きであり、風貌の特色が際立っており、高い改造価値を持っている。一般的に「空心村」（村人のいない村）または立ち退き後の旧村には、住宅の空室率が相対的に高い。空室家屋を買収する、または村人が出資し合い、遊休民家をリゾート化させるうえ、全体の向上に努め、デラックスなリゾートづくりに取り組む（図3をご参照されたい）。同時に地元の村人を雇用し、農民の就職口を解決する。例えば、北京蟹島リゾート村では、観光客に清らかな自然環境を楽しんでもらうため、高品質生活を経営目標とする。

図3 逸品リゾートモデル

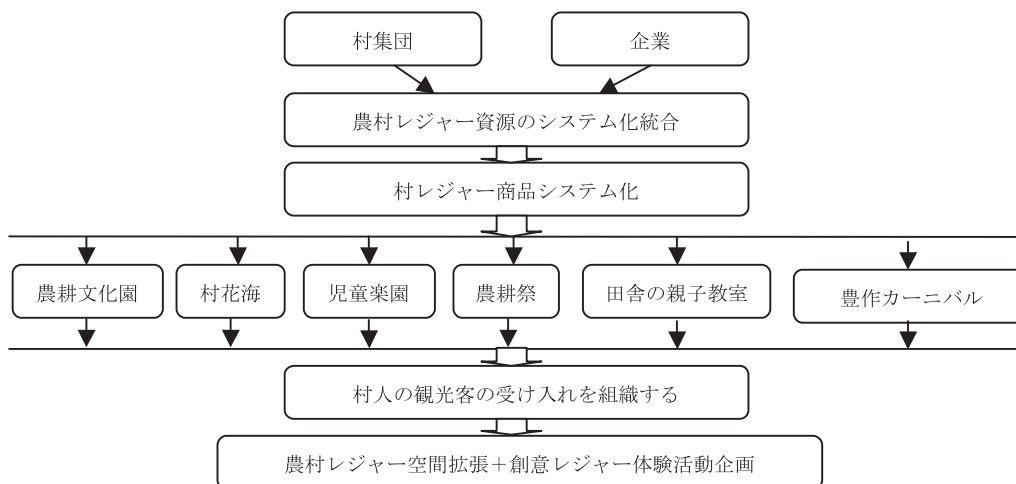


出所：筆者が本論の研究内容に基づいて作成したものである。

(四) レジャー集落モデル

レジャー集落モデル（図4をご参照されたい）は一般的に観光のホットコースにあり、進出性がよく、レジャー資源の賦存が優れている村落では実現されやすい。これらの村落の建設用地は相対的に裕福であり、大型且つ先端的な娯楽プロジェクトの導入に便利である。田舎ならではのイベントを主な吸引物として、村落全体を郷土遊楽場所へと変貌させる。例えば、広東省の順徳長鹿レジャーリゾート山荘、融嶺南歴史文化、順徳水郷風情、家庭生活情緒が一体となり、レジャー娯楽、観光リゾート、ビジネス会議をまとめた総合的な観光地区づくりに取り組む。

図4 レジャー集落モデル



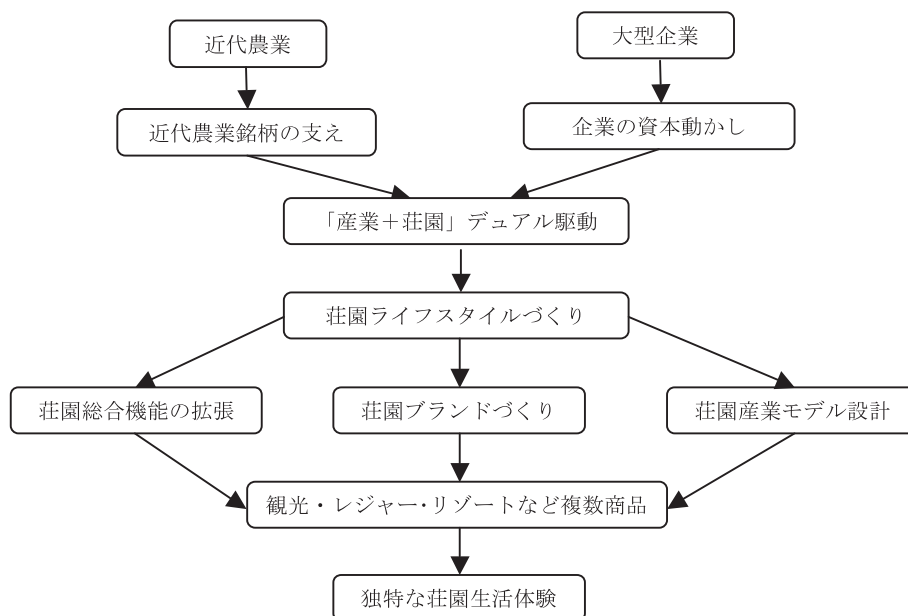
出所：筆者が本論の研究内容に基づいて作成したものである。

(五) 近代農業荘園モデル

農業発展は初歩的に近代化形態を備え、すでに特色のある農産品ブランドが形成された。交通条件も便利で、土地資源が豊かで大型農業企業の進出可能な農村では近代的な農業荘園のモデルづくりに最適である（図5をご参照されたい）。村落全体を農業テーマパークのような形態にして高品質の農村ライフスタイルを向上させる。農民を統一的に安置させ、統一的に荘園

で就職させ、荘園ブランドを利用して農村観光を開発させ、セットサービスを提供する。例えば、上海の孫橋農業区では、近代化農業システムを支えにし、ハイテクバイオテクノロジー関係の農産品加工産業を主導として、農業・科学観光一体化を実現させる。

図5 近代農業荘園モデル



出所：筆者が本論の研究内容に基づいて作成したものである。

四、農村観光開発における主な問題

本論では農村観光開発における主な問題点を下記のようにまとめてみた。

(一) 観光商品の同質化

中国では地域が広くて民俗も多種多様である。現在、農村観光商品の基本的な要素は主に自然景観環境、農村景観風貌、農村芸能スポーツ活動、農村土産物、農村製作、文化民俗、農業生産、飲食、居住などが挙げられる。しかし、これらは主にレジャー農業や観光農業などの観光商品の開発に集中するため、種類が少ないうえ、形も雷同である。それに加え、商品の供給経営の粗放化、同質化が深刻であり、革新の欠如及び地域特色のある文化の有効利用ができていない。

(二) 景観原生の欠如

農村観光の過剰な商業化開発によって農村性そのものの消失になりかねない。ある農村観光は「其の本を揣らずして其の末を斉うす」のように自然景観を軽視し、大量の人造景観または都市景観を建設し、大いに土木を興し、各種の大型建築物を農村に置き、農村のイメージに崩壊的な破壊をもたらし、農村の特色を徐々に低下させた。また、町村観光の企画設計が合理的なものではないのみならず、近代化建設の過熱化によって農村自然環境と生態文明の保存が大切にされていない。観光開発による農村観光業態の多様化で農村に本来の姿を消失させる恐

れがある⁸。

(三) 従業者の職業素養の立ち遅れ

農村観光の従業者は基本的に地元の村民からなっている。農村の生産生活をよく知っているものの、その職業素養は近代農村観光開発のニーズになかなか応えられない。農村観光の従業者のプロ意識が明らかに立ち遅れているのは、主に観光専門知識、文化知識水準、サービス意識、社交能力、現代技術などが挙げられる。ここ数年、各レベルの地方政府は従業者研修に力を入れているが、人数が多く、基礎が弱いため、農村観光の従業者の職業素養の向上は長期間内に改善される見込みがないようである。

(四) 関連政策施行の偏り

中国中央政府と地方政府は一連の農村観光開発の扶助政策を打ち出し、実施しているにもかかわらず、施行政策の偏りは弊害も出てくる。現在の政策重点は農村観光の開発促進に置くのであるが、政策管理力の不足のため、農村観光の盲目的な建設現象が現れる。政策の制限性条件の不明確、一部の地域が優遇政策を受けるため、地元の特徴に合わせた農村観光開発ができなく、政策の奨励と補助を盲目的に求め、財政資源の無駄遣いと自然資源の遊休につながる。

(五) 供給と需要サイドの問題

1. 供給サイドの問題

(1) 時間的なバリア

そもそも農家や漁家には、受け入れる時間的余裕があるのかという疑問を抱く人が少なくない。

(2) 空間的なバリア

家屋がよその人を泊められる構造になっていないのではないか。わざわざ改装までして取り組む意欲と資金があるだろうか。観光客にプライベートなことやプライバシーを覗かれてしまう恐れがあるのではないかという心配をもつのも無理はない。

(3) 心理的なバリア

農家・漁家の人たちは、歓迎していないのではないか。自分たちの農舎や山小屋や漁村などが広い意味での観光の対象になるとはそもそも考えていない上、繁忙期に来られても迷惑であるし、農地に立ち入られたり、農作物・家畜に無神経に触られるのを嫌がるのではないか。生活の場を見せるという発想や、それが美しいという価値観がない。

(4) 資源力のバリア

農村景観は心癒されるほど美しいとは言えないのではないか。(コンクリート構造物や電線ばかりが目について美しくない。)

(5) 認識上のバリア

生活上の利便性のレベルについて、都市住民の想定と農山漁村の実態とにおいてギャップがあるのではないか。そもそも、中国人観光客にしても海外や国内などの旅行先では普段食べない豪華な食事をするものという観念が強い。このため、受け入れ側では最高のもてなしをしようと贅を尽くした食事を提供しようとするが、専門化されていないため無理があり、長続きしない。受け入れられる側も認識を変えていく必要がある。

2. 需要サイドの問題

需要の確実性といえ、利用が想定されている都市居住者は、長期休暇が取れた場合に、衛生条件や通信設備など比較的に立ち遅れる農山漁村で滞在・生活する気分になれるのか。例えば、英国においては社会的に一定の成功をおさめた人はリタイアして田園生活を過ごすのが社会的ステータスの一つであるといわれる。これに対して、かつての日本では都会に出て「一旗挙げる」のが成功の証とされてきた歴史がある。一方、現在の中国における農村観光には未解決の問題が様々あるなか、その需要サイドの問題も無視してはいけない現状である。

五、農村観光開発のトレンド

農村観光は「グリーン生態経済」と「体験経済」を融合させた産物として、農村性及びその農村意向によって共同で農村観光開発の核心吸引力を成している^{9,10}。今後、中国の農村観光開発の見通し、方向性及び策略については、主に以下のような内容だと考えられる。

(一) 商品の多次元化

土地の流転政策の完備と観光経済扶助政策の発表に伴って、都市部と農村部との距離が縮まり、低端化の初級農村観光商品はもはや大衆のニーズに答えられなくなり、「農家楽」、「民俗村」、「田園農荘」、「農業科学技術団地」、「古村落」、「リゾート村」などの商品が数多く作られ、商品のブランド化、先端化が日増しに出てくる。例えば、四川省成都市の「五本のゴールドフラワー」とは、香り満開の農居、幸せ満々の梅林、江家野菜畑、東籬菊園、蓮花池で命名された観光レジャー農業区である。

農村観光商品の多次元化、内容の豊富さ及び体験への観光客の差異性と楽しみが日増しに大きくなる。農村観光開発は能動的に観光客のニーズに合わせ、交通利用の自主化、観光業務の自主化、参与過程の自主化などを含め、観光客により多くの選択を提供する。

(二) 基準化に基づいた個性化の品質管理

絶えず先進国の農村観光の進んだ経験を習ったうえ、それを参考にし、観光プロジェクト開発とサービスの基準化を更に整えていく。人情味のある個性的な観光商品はすでに農村観光競争の新たな態勢になり、標準化のほか、人情味、個性化を最大限に引き出し、全面的に観光商品の品質を向上させ、観光客のそれぞれの特徴とニーズを踏まえて、オーダーメイドのような農村観光商品の提供を目指す。今後の農村観光開発は基準化のもとで個性化の部分を徐々に増やしていくべきだと考えられる。

農村観光は基準化に基づいて個性化のある農村観光品質管理を展開しなければならず、これは市場の選択と、観光客のニーズの変化によった逆襲の結果である。自家用車で旅に出かける観光客の割合がますます多くなり、農村観光の中で特に際立っている。観光客の望んでいる農村は個性化、独特性豊かな観光目的地でなければならない。農村観光は市場の変化に応え、地元ならではの特徴を企画し、商品、受け入れ、マネジメントともに自身の独特性が不可欠である。

(三) 全面的に「観光+」の組み入れ

「観光+(プラス)」という戦略は中国北京伯連投資顧問有限公司によって2015年5月初めに提出されたものであり、「文山州観光業界発展戦略企画」に応用した。つまり、産業融合を促進させ、観光業の発展により多くの機会を与えるとともに、観光の創新成果を経済社会の各分野に深く融合させたうえ、他産業の創新力と生産力を向上させ、より広範な「観光+」を牽引役とした色々な経済開発の新たな常態づくりに取り組む¹¹。「観光+(プラス)」が打ち出されてから、幅広い注目を集めている。中国国家観光局局長の李金早氏は、「観光+(プラス)は戦略の次元、重点業界、注目分野から着手すべきだ」と述べた¹²。新しい常態のもと、異なる産業融合は絶えず新しい観光業態を生み出し、「観光+(プラス)」モデルは大きなパワーを出している。

「綺麗な中国(ビューティフルチャイナ)」を実現させるには、綺麗な農村作りから基礎をなし、農村観光開発に全面的に「観光+(プラス)」を組み入れ、農業産業構造の最適化を調整し、都市部と農村部の経済文化交流を促し、農村の衛生環境を改善し、農村生態環境の保全と建設を促すだけでなく、確実に貧困への扶助と貧困からの脱却の先行者にもなる。農村観光の開発には全面的に「観光+(プラス)」を組み入れ、機能向上、業態拡張、転換バージョンアップという三つの主題を緊密にめぐって政策支援の強化、革新メカニズムの発展、農村観光開発の質とサービスレベルの全面的な向上に取り組む。と同時に、生態+文化、観光スポット+農家、リラックレーション+民俗、古村落+世界遺産、物のインターネット+観光+農村などが挙げられる。

(四) 農村環境の真実性と完全性の保持

農村環境の真実性と完全性は農村観光開発のモチベーションであり、観光客を惹きつける源でもある。フランス、日本などの先進諸国では農村風景の真実性を非常に重視し、農村景観の回復と保全を重要視し、できるかぎり伝統的な、シンプルな景観を保つようにしている。

農村観光の基本的な特徴の認識に基づき、農村観光商品を開発する際に、その土地柄ならではの個性的な特徴を際立たせ、農村観光の本来の風貌の真実性と完全性を確保すべきである。また、農村環境の衰弱性と再生不可性を十分に重視、理解し、郷土文化の原真性と完全性を維持し、文化保全と経済発展の両立を実現させる。

(五) 組織化

農村観光専門協力組織は農村観光専門化程度と集約化水準を向上させる重要な手段である¹³。農村観光実践からいえば、専門協力組織の機能は組織内のメンバーにサービスを提供するのみならず、市場競争への参加を通じて拡張を求めべきである。企業化経営は農村観光専門協力組織の必然的な選択であり、供給側のチェーンの位置づけ、コミュニティー外部投資者共生と決民主権化によって実現させることができる¹⁴。

サービスセンター、協会、観光サービス会社、連合社など農村観光の専門協力組織が相変わらず存在し、専門協力組織の多種多様な形式が並存している。専門組織協力機能の多次元を実現させ、利益関係者の共同チェーンを伸ばし、協力の専門種類を拡張し、徐々にサービス質を向上させ、農村観光協力組織化の役割が大いに果たされる。

六、おわりに

新しい時期に、農村観光開発にあたり、更に戦略性、時代性、科学技術性、文化性、参与性などの観光特性が重視されている¹⁵。終始「観光+(プラス)」をプラットホームにすることをしっかり念頭に置き、郷土文化の調査、保全、新たな構造をできるだけ実現させなければならない。また、農村の生態文明建設と農村観光開発の協同を重要視し、程よく綺麗な村づくりの開発の道を選ぶようにする。本論では農村観光開発への政策を下記のように提案してみたい。

第一は、適確に貧困への扶助を実施し、大いに農村観光を推し進め、品質向上と効果強化に取り組むことである。

農村観光開発では「三農」へのサービスと都市部・農村部住民の観光レジャー消費を出発点とし、開発、規範、向上を続けるほか、多元化推進、特色化づくり、産業化発展、規範化管理、政策支援の強化、発展メカニズムの革新で全面的に農村観光開発の質とサービス水準を向上させ、「農家楽」のバージョンアップに努め、農村経済の発展、農業構造調整、農民の貧困脱却を促進する重要な力と貧困扶助のプラットホームとなる。観光による貧困扶助は開発方法であり、観光を貧困扶助の手段にすることである¹⁶。そのため、土地、金融、農業など農村観光関係政策を実施し、交通、環境衛生など農村公共インフラ整備建設を強化し、全面的に農村観光の基本環境を最適化させ、農業と農村総合機能を十分に利用して、農村観光の質の向上とグレードアップ及び効果増加を推進する。

第二は、農民の主体的な地位を強化し持続的に農民の農村観光開発の能力を強めることである。

農村観光開発が成功できるか否かは、その主体である農民自身の能力によるものである。現在の農民自身の状況から言えば、単に彼ら自身によって農村観光を向上させ、発展させる能力が明らかに不足である。様々なトレーニングと研修活動を通じて、農村観光における農民の主体的な地位を切実に保障し、全面的に農民の認知水準と農村観光開発の総合能力を向上させる。当然、この過程において、政府の関係部門の長期的な育成や研修を強化し、持続的に農民の農村観光開発の能力を向上させる。そのため、農民と農村観光経営者への研修を持続的に強化し、農村観光地住民のコミュニティへの参与意識、参与決策能力の向上及び住民と投資者を通じた利益をともに享受することは、観光目的地の住民のコミュニティ帰属感を向上させる主な道である¹⁷。

第三は、綺麗な農村作りに努め、農村観光の全面的な、科学的な発展を確保することである。「綺麗な中国(ビューティフルチャイナ)」づくりは綺麗な農村なくしては語れない。青山と澄み切った清水があつてこそ、科学的な観光発展観があるのである。農村観光は農村環境を大切にしたいうえ、手段を選ばぬ農村観光開発を避けるべきである。また、農村観光の名を名義にして農村生産と生活空間を圧縮し、いわゆる農村観光総合体を起こすことも許されない¹⁸。さもないと、農村観光開発の出発点と帰着点に背いている。とりわけ注意すべきことは、農村観光開発の試験地域について、一部の地域では誤った認識で盲目的に農村観光実践を展開し、実情に合わせない、統合しにくい、実施しにくい窮地に陥れる¹⁹。企画の混乱によって引き起こされた無秩序な問題は直視すべきである²⁰。そのため、企画水準の向上、用地の合理化、企画と施行の責任追跡を行ない、都市部と農村部の統一された企画、農村企画と土地利

用企画を基礎に、農業、水利、交通、観光など関連企画を統合し、全面的な農村観光保全企画があつてこそ、段階的に綺麗な農村づくりの青写真が実現でき、農村観光の全面的な、科学的な発展を確保することができるのではないかと考えられる。これは更に、距離的にも近いうえ、交通の便利さや受け入れやすさなどで北京・天津・河北からなる京津冀地域における近郊型観光と農村観光への示唆効果も大きいものである。

参考文献

- 1 刘德谦. 关于乡村旅游、农业旅游与民俗旅游的几点辨析 [J]. 旅游学刊, 2006, 21(3) : 12-19.
- 2 周兰芳, 贺江华. 我国乡村旅游发展总体情况及政策建议 [J]. 旅游纵览月刊, 2014(10) : 61-62.
- 3 新华网. 中国 17% 贫困人口将在“十三五”期间实现旅游脱贫 [EB/OL].
http://news.xinhuanet.com/fortune/2015-07-10/c_1115888874.htm, 2016-08-17.
- 4 钟欣. 我国乡村旅游接待将达 20 亿人次 [N]. 农村日报, 2015 年 9 月 29 日.
- 5 Gao S, Huang S, Huang Y. Rural tourism development in China [J]. International Journal of Tourism Research, 2009, 11(5) : 439-450.
- 6 马勇, 赵蕾, 宋鸿, 等. 中国乡村旅游发展路径及模式 [J]. 经济地理, 2007, 27(2) : 336-339.
- 7 张树民, 钟林生, 王灵恩. 基于旅游系统理论的中国乡村旅游发展模式探讨地理研究 [J]. 2012, 31(11) : 2094-2103.
- 8 Su B. Developing Rural Tourism : The PAT Program and 'Nong jia le' Tourism in China [J]. International Journal of Tourism Research, 2013, 15(6) : 611-619.
- 9 王琼英, 冯学刚. 乡村旅游研究综述 [J]. 北京第二外国语学院学报, 2006(1) : 115-120.
- 10 尤海涛, 马波, 陈磊. 乡村旅游的本质回归: 乡村性的认知与保护 [J]. 中国人口·资源与环境, 2012, 22(9) : 158-162.
- 11 主动融入国家发展战略 实现文山跨越式发展 [EB/OL].
<http://travel.sina.com.cn/china/2015-08-28/1517313934.shtml>, 2015-08-28.
- 12 李金早. 开明开放开拓 迎接中国“旅游+”新时代 [N]. 中国旅游报, 2015-08-21.
- 13 胡敏. 我国乡村旅游专业合作组织的发展和转型—兼论乡村旅游发展模式的升级 [J]. 旅游学刊, 2009, 24(2) : 70-74.
- 14 Zou T, Huang S, Ding P. Toward A Community-driven Development Model of Rural Tourism : The Chinese Experience [J]. International Journal of Tourism Research, 2014, 16(3) : 261-271.
- 15 黄震方, 陆林, 苏勤, 等. 新型城镇化背景下的乡村旅游发展—理论反思与困境突破 [J]. 地理研究, 2015, 34(8) : 1409-1412.
- 16 Cascon J. Pro-Poor Tourism as a Strategy to Fight Rural Poverty : A Critique [J]. Journal of Agrarian Change, 2014, 15 : 499-518.
- 17 杜宗斌, 苏勤. 乡村旅游的社区参与、居民旅游影响感知与社区归属感的关系研究—以浙江安吉乡村旅游地为例 [J]. 旅游学刊, 2011, 26(11) : 65-70.
- 18 尤海涛, 马波, 陈磊. 乡村旅游的本质回归: 乡村性的认知与保护 [J]. 中国人口·资源与环境, 2012, 09 : 158-162.
- 19 黄震方, 陆林, 苏勤, 章锦河, 孙九霞, 万绪才, 靳诚. 新型城镇化背景下的乡村旅游发展—理论反思与困境突破地理研究 [J]. 2015, 08 : 1409-1421.
- 20 王琳琳, 梁留科, 王伟, 刘向前, 康珈瑜, 张艳平. 基于利益相关者角度的善行旅游发展研究 [J]. 洛阳师范学院学报, 2016, 06 : 29-32.